クラウス・マンの闇と光
― 亡命小説『火山』をめぐって（その7）―

斎 藤 佑 史

はじめに

本稿では、クラウス・マンの亡命小説『火山』の第三部の第4章を見ていく。この章は第三部の最終章の前にある章であるが、最終章を待たずしてもこの亡命小説の特徴の全体像がほぼ見えてくる章でもある。 年代記としては1938年の出来事を扱い、物語の舞台は前回よりヨーロッパから主人公たちが亡命したアメリカが中心となっているが、その他の亡命地も舞台になっているところもあるので順を追って見ていきたい。

1

第4章の冒頭で、K・マンは1938年の2月と3月には、かなり多くのドイツからの亡命者がもうすでに5年間も亡命生活を送ってきたことに思いを寄せ、「それは昨日の出来事のように思われる。当時はちょっと経てば、2、3ヶ月すれば戻ってこられるだろうと思っていた」と述懐する。さらに付け加えて「我々は思い起こす、この5年間は一日のようであり、しかしまた同時に果てしない日々のようでもある」と続ける。作者K・マン自身の亡命した日が3月18日、パリということなので、この冒頭部分は作者の体験による感慨が色濃くにじみ出ている箇所と言ってもよい。亡命生活も5年となれば、それはもはや一時的な例外的生活ではなく、亡命そのものが自身の生活の一部になる日常生活とならざるを得ない。亡命当初は、亡命生活を一時的なもの、冒険的なものと見なすこともできたが、長引く亡命生活は、当初抱いていた帰国への希望も遠のかせ、亡命生活が日常化するに従って、冒険的な要素も減り、日常会話の中に帰国という言葉すら語られることが少なくなった。「日常生活は、冗談を理解せず、ひとがあいまいな願望で日常生活の現実をそらすことも許さない」状態になったというのである。帰国が困難となれば、亡命生活を現実にどう切り抜けるかが切実な問題になる。かくして「ベルギーを通過するトランジットが問題になり、アメリカの身元保証が興奮させるテーマになる」などと、具体例を作者は例示し始めるのである。

この第４章の冒頭で、まずＫ・マンはこの物語を先に進めるにあたって、５年も過ぎてしまった亡命生活を、自分の体験も含めて振り返り、上からドイツ人の亡命生活全体を俯瞰するような形で記述する。それはこれまでの５年間のドイツ人亡命者たちの生活の総括という意味合いもあるが、そこで注目すべきは、この５年間の亡命生活で、その生活の困難さ故に、体調を崩したり、孤立して亡命生活に耐えることができない多くのドイツ人亡命者がいる半面、その亡命生活がもたらすあらゆる困難にもかかわらず、亡命生活を希望を以て耐え忍びつつ、さらに活動を続けるドイツ人もいることに言及し、明暗わかれる二つのグループをＫ・マンらしいに視点で分析している点である。即ち、最初の亡命生活に耐えられなくなっていく人たちは、トランジットの獲得や金銭の調達のような亡命生活に必要な問題に絶えず頭を悩ましているうちに、性格がおかしくなり、心の病いを得るようになり、また知的なレベルも落ち、繊細さに対する感覚もストップしてしまう。健全な感覚が失われて、生き残るのは「ひとを愚鈍で全く冷淡にさせてしまうエゴイズム」だけと指摘する。こういう人たちは、自身の不幸に関係ないことは語ることも、考えることもしないので、孤独になり、非社交的に陥るとＫ・マンは分析するのである。このグループは、亡命体験が、亡命者を破滅に導くような弱い亡命者の問題とすれば、逆に亡命体験が亡命者を人間として成長させるような強い亡命者を次にＫ・マンは例示するのである。

他のグループの人たちは、もちろん厳しく緊張した生活方式を上手に手に入れた。異国は彼らをより大胆に、賢明に、良質にさせた。彼らの同情的なファンタジー、彼らの探るような思考力、彼らの信念と疑念は発展した。以前、彼らはおそらく軟弱で、怠惰、無知で感傷的であった。彼らが通ってきた厳しい学校である亡命は、彼らを人間にしたのであった。彼らの変化や試練を与えられた心は、感受性豊かになると同時に、また決然としたものになった。

この引用文で示された亡命体験によって鍛えられて強くなった人たちのことは、作者のＫ・マン自身が、まさに亡命によって鍛えられて、大きく成長した作家だけに、説得力のある記述となっている。彼は亡命体験よって作家として成長したが、ただ『火山』の登場人物たちは、必ずしも作家だけとは限らない。これまで見てきたところでは、『火山』の主要な課題は大きく見て、ナチスドイツの脅威から祖国を逃げ出したドイツ知識人の問題と考えてよいであろう。ナチスドイツに対するドイツ知識人の生き方が問われているのである。Ｋ・マンは第４章の冒頭で、この小説のいわば骨組みを意識させるために、５年目に入ったドイツ亡命者の状況のプラス・マイナスを上から俯瞰するように、読者に示したのである。その知識人たちの生き方をどう受け止めるかは、まさしく読み手の課題であるが、物語はこの後はそれぞれに世界各地に散ったドイツ亡命者たちの1938年の今と後が、語られることになる。そこで物語の進行に従って、順次世界各地に亡命したドイツ人のそ

の後を見ていきたいのであるが、いずれの場合もすでに登場回数には差はあるものの何回もこの物語に登場してきた人物ばかりである。

2

最初に採り上げられるのは、中国の上海に移って活躍するジャーナリストのヘルムート・キュンディガーと、パリで開いたバーがうまくいかず、心機一転自分の夢をかけて上海にやってきたボビー・ゼーデルマイヤーである。キュンディガーは、パリに亡命した5年前は気の小さな文学青年であったが、やがてパリのドイツ語日刊新聞でいいポストについて、多くの論説を書くようになり、今は上海からパリの新聞・雑誌に卓越した記事を送るジャーナリストに成長した、すでに読者が知っている人物である。彼のフランス語の文体も明確で洗練されている。一方、ゼーデルマイヤーも、すでになじみの人物であるが、白髪の老人で、上海にきてバーを開いて成功を収めたのだが、そのバーが入っていたホテルが、日本軍の攻撃で破壊されるなか、奇跡的にどうにか助かる。従業員たちは犠牲になり、家具類は損失した。しかし瓦礫のなか、ゼーデルマイヤーは、持ち前の明るさでこの危機を乗り越え、新たにバーを再建し、再び夜の客を取り戻したのである。このゼーデルマイヤーと先のキュンディガーが会って、さらなる前進を願って乾杯する場面でまずは中国のドイツ亡命者の話は終わる。

次なる場面は、成功の夢を求めてパリからチャンスを求めて単身でアメリカに向かうカバレットの芸人、イルゼ・イルの物語である。これまでアメリカでの成功を夢見てアメリカに渡った同じような人に、マーリオンの母の小学校時代の友人の歌手のティラ・ティボリがいて紹介したことがある。[1] 彼女はハリウッド映画スターを夢見て海を渡ったのであるが、結局夢を果たすことができず、幻滅してマーリオンの母のいるチューリヒに戻った。イルゼ・イルもまたヨーロッパで行き詰まりを感じて、アメリカで認められようと海を渡るのであるが、ティラ・ティボリとの違いは、イルゼはティラほどヨーロッパでは有名ではなく、従ってアメリカでは無名と言ってよく、それがアメリカ到着した時の二人に対するアメリカ側の対応で違いがよく分かるのである。つまり、ティラは船でニューヨークに到着した際には、レポーターにインタビューされたり、ロサンゼルスの新聞に彼女のポートレートが記載されたりした。一方イルゼは、小さな怪しい船の三等席から緑色の髪と菫色の頬という奇抜な姿で、降りてきたためにニューヨーク港の係員に犯罪人と疑われて、湾内にあるエリス島に連れて行かれた。エリス島は当時、外国人と国外追放者の収容施設として使われていたのである。イルゼはこの島の施設にて2、3日取り調べを受けた後、身元保証人が派遣して

1）拙稿「クラウス・マンの闇と光－亡命小説『火山』をめぐって（その6）経済論集　東洋大学経済研究会第38巻第2号 2013年（167頁）参照

くれた弁護士の助けで、疑いが晴れてニューヨークにやっと入ることができたのである。このティラとイルゼの違いは、このニューヨーク到着時だけでなく、到着後も続くのであるが、イルゼはティラのように何らかの当てがあってアメリカにきたのではなく、取りあえずメイドになって自活しながらチャンスをねらうというかなり杜撰な計画でアメリカにやってきたのである。だがメイドの仕事を見つける前に、ある小さなレストランでイルゼが夕食をとっているときに、パリのカバレット時代の熱烈なファンであったというジョンソンというアメリカ人に声をかけられ、この出会いによって彼女のアメリカでの生活は思い描いていたものとは違う方向に進むことになったのである。つまり、この男の紹介で、メイドではなく、ある高級フランスレストランの入り口の応接係りとして働き始めたのである。注目すべきはその後のアメリカでのイルゼの人生は、彼女の運命に任せようと、ティラの場合と違って作者はここで話を打ち切ってしまっていることである。ティラの場合もそうであったが、イルゼのアメリカ行きも、ヒトラーのナチスに対して自由を求めるというような大義名分のある知識人の亡命の問題とは異なるものである。そこで作者はイルゼのその後の人生に深追いはせず、作者の関心は次に移ってしまったのではなかろうか。その意味で話の展開が面白く、内容的にも考えさせられるものがあるのが、パリを舞台とする次の場面である。

パリには1938年になってもパリに残っている亡命ドイツ人たちがおり、ここに再登場するのはモンゴル人のような眼を持った、辛辣な皮肉屋ナータン・モレリと恋人ジッロヴッチ嬢、社会民主主義者テオ・フンムラー、そして哲学者で社会学者のダビット・ドイチュである。このパリの舞台で展開される物語としての面白さは、テオ・フンムラーを除いて前回登場した時と置かれている状況が変わり、登場人物たちが変化を遂げて現れてきていることである。まずナータン・モレリは病気が進行して死をも想定しなければならないほど弱った状態で登場し、人を寄せ付けなかった以前の傲慢な辛辣さは消え、やつれた仏陀のような優しい顔になり、「ベルリンは何と素晴らしいのだ」とドイツへの郷愁を語る人に変わった。かつては、自分はドイツ人では決してないと主張していたのに、今は母親がミュンヘン生まれだと告白して、自分はドイツ人だと言い出しているのである。このナータンの変化に恋人ジッロヴッチ嬢はいかに反応したのだろうか。

彼女（ジッロヴッチ嬢＝筆者注）は、自分たちの間の一切のことがいかに始まり、それがいかに素晴らしく変化したかを考えるたびに、優しい気持ちにと共に、勝利感が生じた。＜彼は私のものだわ。彼は私に屈服したのだわ＞　この彼女の愛の中には、いくらかの復讐の気持ちが入っていた。

これは二人の恋人関係の複雑な面を表している箇所であるが、病弱になって下降線を辿るナータンと違って、ジッロヴッチ嬢はパリでの通信社の経営が成功し、今や国際的な評判まで得るようになっていた。従って、ナータンは、精神的にばかりでなく、経済的にもジッロヴッチ嬢に依存する

ようになっていたのである。この二人の逆転現象という展開も興味深いが、亡命中の生き方にかかわり、もっと面白い展開はダビット・ドイチュの場合である。

ダビット・ドイチュと言えば、1933年４月の、この物語の第一章のパリの場面から登場し[2)]、パリが舞台と言えばほとんど顔を出すという、言わばなじみの哲学者、社会学者である。このダビットが今、重い病床にあるナータンを病院に見舞うというところから話が展開していく。「突然の訪問です」と言って、ある日ダビットは、ナータンを驚かすわけだが、そこで交わされる二人の会話が注目すべき展開を見せるのである。このナータンのダビットへの見舞いは、お別れの訪問なのだが、どこへ何のために行くのかとダビットに問われて、彼は指物師になるためにデンマークのユダヤ人の手工業者養成機関に出かけると答える。それを聞いてナータンは真面目な顔になり、ダビットの社会学者としての執筆活動をこれまで大いなる関心を以て追ってきたと答えると、「どうかやめてください！」とダビットは叫ぶように言う。涙ぐんで彼は、「もはや考えることも書くこともできない」と訴える。それに対してナータンが、「私にはあなたは相変わらず優れたこと考え、書き表すことができると思う」と言うと、才能のあったマルチィンが死んでいく姿を見て以来、私には何もできなくなったと彼は強調する。

「社会的な力とその発展の分析にはもはや興味がありません」と、彼(ダビット＝筆者注)はわが子を愛することを止めたと告白せざるをえない母親のように、大きな悲しみをもって断言した。―「もし社会が痙攣を起こした状態になり、全ての経済的、道徳的、知的な法則が突然に疑わしいものになり、我々の目の前でその崩壊が起こるなら―、その崩壊の起源と確実な結末を理論づけることが重要などと思うことは、私には意味がないように思えるし、軽薄なこと以上に邪悪に思えるのです」

このダビットの発言に対して、その理論づけは有益に違いないとナータンは反論し、それは二日酔いの考え（Kater－Idee）と一蹴するのである。このようにして両者の会話はダビットの生き方をめぐって対立構造をもって次々と進んでいくわけであるが、思わずその中に引き込ませるような作者Ｋ・マンの描き方も臨場感に迫るものがあると言ってよいであろう。この両者の会話は、この後も言い争いの形で進むのだが、最終的にはダビットが、理論的に社会的な問題を解明しようとしても、現実から遊離するばかりで国民とも縁遠くなって孤独になるばかりなので、これを解決するためには指物師になって社会との関わり、世界との関わりを取り戻す必要であることを力説するに

2）拙稿「クラウス・マンの闇と光－亡命小説『火山』をめぐって（その２）経済論集　東洋大学経済研究会第34巻第１・２合併号　2009年（123頁）参照

及んでナータンが納得するという形で終わる。このタビットの生き方の変化は、形こそ違え先に検討した言葉を使う詩人の危機意識からペンを捨ててスペイン市民戦争に身を投じたマルセルと共通したものがあることに注意すべきである。ダビットの場合は現実と遊離する学問に絶望して、指物師という単純労働へと行動を移すことになるのである。次の物語の展開は、そのマルセルが戦死したスペインが舞台となる。

3

マルセルがスペイン戦争で戦死した場所は、マドリッドであったが、これから登場する三人の人物、マティエス博士とその妻マイスェ、そしてムッター・シュヴァルベの1938年３月の物語の舞台はバルセロナである。この時バルセロナはドイツ、イタリアの爆撃機の空襲を受け焦土と化し、三人のドイツ人はかろうじて難を逃れる。そこにK・マンによって描き出されているのは、主に爆撃によって破壊された阿鼻叫喚のバルセロナの都市の光景である。三人の会話の場面はごく少ない。シュヴァルベが泣いている子供の声を聞きつけ、倒壊した建物の中から奇跡的に無傷であった男の子を救出し、二人の所に連れてきたときの場面には喜びの会話が生まれたが、これは例外的に救いのある箇所で、その他は戦争の恐ろしさを伝える瓦礫の山と化した悲惨なバルセロナの光景である。それに続く場面は、ザムエル教授がいるエルサレムになる。ザムエル教授が前に登場したのは、銀行家ベルンハイムの招待で出かけたマジョルカ島であった。だが事態が急変して平和の楽園が爆撃を受けて危険になり彼は島を逃げ出した。ところが、今はユダヤ人とアラブ人が反目し合うエルサレムで画家としての仕事に彼は従事している。ただマジョルカ島を逃げ出してさらに危険な状態に陥るのは、ウィーンに戻った銀行家ベルンハイムの方なので、話をウィーンに進めたい。

1938年の３月のオーストリアと言えば、首相のシューシュニックが、圧力を強めるナチスのヒトラーに対して、回避的な態度をとり抵抗するも、ついにその圧力に屈してドイツ・オーストリア合併に道を開きオーストリアの独立を放棄せざるを得なくなった時である。オーストリアの国としてまさに激変の受難の年と言ってもよい時に、その首都ウィーンに銀行家ベルンハイムは登場するのである。彼は初め、ウィーンにドイツ軍が進駐するなど信じられず、オーストリアの将来に関して楽観的な見方をしていた。カトリック教徒としてヴァチカンの力を信じていたし、ドイツ軍が動けば、ムッソリーニのイタリア軍が黙っていないと考えていた。彼は銀行家としてウィーン社会で重要な役割を果たしており、ウィーン郊外の彼の別荘はウィーンの要人の集合場所でもあった。しかし彼の楽観的な見方は、ヒトラーのナチス・ドイツ軍が1938年３月12日の早暁、オーストリアに進駐した時にイタリア軍は動かず、イギリス、フランスなどの他のヨーロッパ諸国もそれぞれの事情からヒトラーのこの大胆な行動を黙認したので、もろくも崩れることになった。ヒトラーの用意周到な事前準備が功を奏し、オーストリア側からの抵抗もなく、ヒトラーのオーストリア合併は、言

わば合法的な形で無血の進駐となって達成されたのである。もともとオーストリアの国民の多くはこの合併を望んでいなかったにも拘わらず、一旦この合併を許してしまうと、一転して熱狂的に進駐してきたドイツ軍を歓迎することになった。この変化の犠牲になったのが、シューシュニック首相を支えてきた旧体制派、つまりベルンハイムもその一人だった愛国主義者達であった。従ってここで展開されるベルンハイムの物語は、ウィーンの銀行家として裕福な生活を送っていた人の、見る影もなく落ちぶれていく零落物語である。

ドイツ軍がウィーンに進駐してきたとき、ベルンハイムの友人たちは逮捕されたり、国外に逃げ出したりした。ベルンハイムはロンドンに脱出しようとして、フランスの通貨ビザを手に入れようと友人の総領事がいるフランス領事館に車を走らせる。ウィーンはその時一夜にしてぞっとするように変化をみせ、「過渡期や準備など全くなく、見知らぬ不気味な様相を呈していた」のである。鍵十字の旗が至る所にたなびき、ナチスの制服の人であふれていた。ベルンハイムにとって彼らは殺人者のように見えたのである。車はフランス領事館の前に着くも、列をなして沢山の人が並び入れず、引き返す。この日のウィーンは、異常な雰囲気でドイツ軍を歓迎する市民の熱気にあふれ、それが時に反ユダヤ感情の高まりにもなり、ユダヤ人に対する暴力沙汰にまで発展する不穏な状況をK・マンは臨場感もって描き出すのである。たとえば青いエプロンをした太った婦人がふざけてベルンハイムの友人の一人の顔を平手打ちした時、ひどい笑いが起こったが、それがいつの間にか彼の友人がその婦人を虐待したと興奮した民衆に逆に受け取られ、友人にさらなる暴力の雨がふるという具合に、混乱したウィーンの街の様子が描き出されるのである。しかしその影響が友人に留まっていればまだしも、深刻なのは次の場面で、ベルンハイム自身が、車から引きずり出され、暴力的な恥辱を受け、意識を失うまでに痛めつけられる様子が続くことである。つまり、「さらに走れ！」とベルンハイムは運転手に命令しても、興奮した人々に取り巻かれ、車は立ち往生し、ビールで酔った鍵十字の腕章をつけた男の尋問を受け、「私は外国人だ！」と言っても信用されず、逆に「脱税者だ」と疑われる。そしてその男によって車から引きずり出されるのだが、その際転んで通りの敷石に額が当たり血を流すも、首筋をゴム製の棍棒で打たれるなど、彼はこれまでの人生でまだ受けたことのない痛みを体験させられる。しかしもっと屈辱的なことは、興奮した人のひとりから「地面を掃除させよ」という声がかかり、それがさらにエスカレートして、「トイレを掃除させよ」という声となり、実際に強制的に彼は街の公衆トイレの掃除をさせられるのである。裕福な一人の銀行家が、一転して社会の最下層の人の仕事、トイレ掃除を人前で強制的にやらされる、このプロセスをいわばヒトラーのオーストリア合併のこの時代の犠牲者としてK・マンは悲劇的にまたはグロテスクまでに描き出すのである。このベルンハイムのケースはこの亡命小説に登場した人物の中では、最も悲劇的なコースを辿った例の一つと考えられるが、それはヒトラーのオーストリア合併直後の混乱したウィーンに彼がいたからでもあった。ただ亡命場所によっては、まだ自由を

獲得できる都市が残っていた。

そこで物語は、次にスイスのチューリヒ移るのであるが、そこには裕福な老夫婦オッティンガーの協力を得て、ペンション「憩いと静寂」を経営している二人の女性、マリアールイーゼとティラがいた。この場面は前の暗いウィーンと違って、祖国を追われた亡命者たちを助ける人たちが登場して、救いのない状況が続くこの亡命小説の中では希望が持てる箇所である。特に多くの亡命者を日々経済的に支援している老オッティンガーが、資本を取り崩して救援活動をするのに不安を覚えて、君の母親も反対しているのにどうかねという質問に対して、「どのくらい私たちはまだ生きるの、数年でしょ」と答え、子供がいるのなら資本はそのままにしておく必要があるけれどもと続け、締めくくりに「亡命者は私たちの子どもでしょう」と言って自分の立場を明らかにするオッティンガーの妻の態度は感動的ですらある。

上海から始まった第４章の物語の最後は、アメリカに亡命して結婚生活を始めたしマーリオンとアーベル教授のその後ということになる。この二人が一緒になるプロセス、その愛の複雑な関係についてはすでに検討したところだが[3)]、今二人はアメリカ南部の州、ノース・カロライナでアーベルは大学に勤め、マーリオンは妊娠してさしあたり家庭の主婦として暮らしている。一見すると生活は平穏で快適であるが、机の上にはヨーロツパ大陸から助けを求めるSOSの電報がいくつも届いていて、特に活動的なマーリオンが気が気でない生活を送っている様子がK・マンによって巧みに描かれている。夫が自分と結婚したことに満足している様子を夫の顔から読み取ると、「私は恥ずかしい！」と叫び、ここは安全な生活が送れるが、しかし世界は至る所で不幸が生じ、しかもペストのように広まっているのにここで安穏な生活を送っていていいのと言う妻の苛立ちである。その思いが高じると「私は子供をもうけることはできない」とマーリオンが夫に対して言うまでになる。なぜなら彼女はヨーロッパに戻り、ナチスと戦わなければならないので子供が足手まといになるからとまで言い出す。反ナチズムの活動家としてこれまで積極的に生きてきたマーリオンの立場を考えれば、この彼女の苛立ちは分からなくもないが、この妻の苛立ちをアーベルが夫の立場で、どう説得して鎮めるかがこの場面の最大課題となる。「私は子供をもうけることはできない」とマーリオンは再三繰り返すが、このことを強調するにあたってマーリオンは、興奮のあまり、アーベルに対してこのお腹にいる子は、あなたの子ではなくある放浪者の子であるから、あなたに関係がないというような挑戦的な態度を示す。それに対してアーベルは、「この子は私たちの子だ！」「その小さなマルセルは私たちの子だ！」とはっきりと言って、揺れ動く妻の心を鎮めようと試みる。今妻のお腹にいる子の名を妻のかつての恋人マルセルと名付けたのは、妻のかつての複雑な男性との

3）拙稿「クラウス・マンの闇と光－亡命小説『火山』をめぐって（その６）経済論集　東洋大学経済研究会第38巻第２号　2013年（180－184頁）参照

愛の歴史を知っているアーベルの彼女に対する大きな愛のなせる技に他ならない。このマルセルと名付ける子を無事誕生させて、大きく育てることこそが私たち夫婦の務めだと老いた夫は若い妻に諭すように説得する。その説得の内容が重要なのだが、この二人の関係において常に年長のアーベルがすでに検討してきたように主導的な役割を果たしてきたのだが、この場面でも夫が重要な役割を果たすことになる。つまり妻が宿した子を犠牲にしてまでヨーロッパに出かけ戦いたいという訴えに対して、敵に勝利するにはそのように早急に結論を出して行動すべきでなく、忍耐が必要であると説得するのである。そのために「耐え抜くことこそ全てである」というリルケの言葉をアーベルは引用する。それに対してマーリオンは私もリルケをよく引用するけれど、その言葉は聞いたことがなく間違った言葉だと反論する。それに対して夫は妻にやさしく正確に説明しようと試みるのである。

およそ忍耐する人が、勝利するのです。全ての事はゆっくりと進み、時間がかかるのです。我々は、その日、その時の出来事を過大評価してしまうのです。我々は、その出来事を不気味に様式化し、強力な名前をつけます、歴史的転換とか世界の滅亡など。それは間違っており、空しいです。我々の時代は、それがまさに我々の時代であるということで、全て変化し、そして中断してしまうのではないだろうか。過程は進行します－粘り強く、ゆっくりと、さらにゆっくりと... 障害と後退はあります、今我々が体験しているところです。どうか余りにもショックを受けたり、動揺しないようにしましょう。障害や後退によって混乱し、狼狽しないように。愛する人。信頼してください、前進することを。私の言うことを信じてください、大きな関連ではこれらすべてはごくわずかしか計算されないが、しかし将来は今予想するよりも、落ち着いて冷静によくなることが判断されるでしょう。

この丁寧な夫の説明に関わらず、始めマーリオンは、「血と涙の川が流されているのに、個人的な小さな幸福に逃避するのは恥ずかしい」とマーリオンが持論を崩さないので、私の言っていることは、個人的な小さな幸福ではないと強くアーベルは反論する。彼の言っている幸福とは、多く悩んだ末に獲得される困難で深い幸福のことで、勇敢さや死、英雄的な死も幸福な生き方の一つかもしれないが、それは易しいことなのだ。「生きるということは、もっと難しく重要なことだ。幸福であるということは、私たちにとって最も難しくて重要なことだ」と最後に彼の幸福論を展開する。その上でマーリオンにわが子を犠牲に外に戦いに行くのではなく、忍耐を通して真の幸福を得られるような困難な道を選択させるのである。このアーベルの粘り強い愛の力によって、一旦は自殺した妹ティリと同じように「私は子供を産むことができない」と言っていたマーリオンはその危機を脱することができたのである。

終わりに

次の第５章は第三部の最終章であると同時に、この物語の最終章でもある。作者Ｋ・マンはこの物語の最後にキーキョウと天使を再登場させ、この長かった年代記風亡命小説を締めくくる。その背景には1938年３月12日のヒトラーによる無血のオーストリア併合、これを機にズデーテン＝ドイツ人問題を手がかりに、チェコスロバキアへと着々と侵略計画を推し進めるナチス・ドイツの動きがある。この動きが戦争にまで発展するのを止めようとして結果的には失敗して戦争への扉を開くことになったイギリス首相チェンバレンの平和政策もこの年の秋から始まった大きな政治的出来事であった。このような背景の中で、この物語は大詰めを迎えるわけであるが、まず場所は特定できないが、大都市のはずれにあるカトリックの施設、十字架が壁にかかっている修道士の小部屋にいるキーキョウが物語に再登場する。彼はカトリック信者として宗教との関わりが深く、また彼のもとにこれまで度々天使が現れると言う意味でも、この物語ではキーキョウは特異な登場人物である。このキーキョウが再び天使の力を借りて、現実ではありえないことだが、世界に各地に散った亡命者の様子を空から見に出かけ、キーキョウが天使と共に見たものを体験的に描くことによってこの長い亡命小説は幕を閉じることになる。キーキョウが何故天使の力を借りて亡命した人々を見に出かけるかというと、天使のアドバイスでもあるのだが、彼が亡命小説を書こうとしてその夢を果たせず病没したマルティン・コレラの代わりに、密かに大亡命小説を書きたいという夢を抱いているからに他ならない。第５章はキーキョウとこの天使との出会い、しかもこれまでの天使とは違う自ら「故郷喪失者」と名乗る天使との出会い、そしてその天使に導かれての亡命者達のその後の行方を尋ねての飛行の旅の模様がその内容である。具体的な訪問場所はアメリカに亡命したマーリオンとベンヤミン・アーベル夫妻、そして生まれたばかりのマルセル、パリのダビット・ドイチュ、次にスペインのバルセロナから遠くないトルトサにいるスペイン市民戦争に国際義勇兵として参加したハンス・ヒュッテ、そして最後は独仏の国境で脱走を図るディーターである。ディーターと言えば、この亡命小説の初めと終わりを飾るプロローグとエピローグの手紙書いた若いドイツ人としてすでに検討したことがある。[4)] 物語の展開としてはキーキョウを今まさに脱走しようとするディーターの場面に天使が導いてきて、そこで天使はディーターの危険な脱走劇を助けて、無事彼を亡命させたのである。第５章のここまでに至る物語の展開は、天使の登場もあって奇想天外的な要素もあり面白いのだが、これを反ファシズム小説としてどうとらえるのか、最終章の第５章をもう少し掘り下げて考えることによって改めて検討したく思うので、第４章検討の本論考はひとまずここで閉じたい。

4）拙稿「クラウス・マンの闇と光－亡命小説『火山』をめぐって（その１）経済論集　東洋大学経済研究会第32巻第２号　2007年（５頁－10頁）参照

テキストとしては、Klaus Mann: DER VULKAN Roman unter Emigranten, edition spngenberg im Ellermann Verlag. München 19.1977を用いた。なお、本文中テキストから直接引用した箇所があるが、その注は煩雑になるので省略した。

参考文献

1）Fredric Kroll: KLAUS − MANN − SCHRIFTENREIHE BAND5 1937-1942 TRAUMA AMERIKA, Edition Klaus Blahak・Wiesbaden, 1986

2）Nicole Schaenzler: KLAUS MANN Eine Biographie Campus Verlag Frankfurt/New York 1999

3）Uwe Naumann: KLAUS MANN Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1984

4）Carol Petersen: KLAUS MANN Morgenbuch Verlag 1996

5）『ヒトラーの時代（下）野田宣雄著　講談社学術文庫69　講談社　1983年